戦争社会学研究 1

悶死と散華の間 ― 戦没学徒の意味世界

青木　秀男

戦争はもう嫌だ。この戦後の国民の心情は、崩れつつある。戦争が懐旧されている。潔く散華（花と散るように死ぬこと）した若者は日本人の鑑である、昔の若者には死を賭ける目的があったと。しかし、だれが潔く散華したというのか。若者は何に死を賭けたというのか。死者の実像を裁断する言説を、生者は黙許することができない。生者は、死者の慟哭に心を傾け、叫びに耳を澄まさなければならない。学徒兵が書いた。「国に殉ずるということ、戦死するということ ― それは何も犠牲といわれるべきものではなくて、ある人間の、ある時代における生き方―必死の力をこめた生き方そのものなのである」［記念会、1995：165］。……これが本稿の原点である。戦死者の手記を読み、行間の意味を探る。筆者にとって不都合な事実を含め、死者の生と死の軌跡を辿って、個々の意味を解釈する。そこには、テクストの問題があり、構成の問題があり、解釈の問題がある。それらの壁を越えて、死者の事実世界を明かし、（一つの）解釈を施す。この手続きを経てこそ、イデオロギーが依拠する事実の真義を評定することができる。本稿は、アジア太平洋戦争の戦没学徒（以下学徒）の手記（手紙・遺書・日記・メモ等を含む）を資料に、彼らが死をどう受容したか、に焦点を当て、「ある時代における生き方 ―― 必死の力をこめた生き方」の一断面に迫りたい。戦死とは、「殉国」に回収された単純な死ではない。死とは、（それを予感する）生自体である。戦争と徴兵の時代に、学徒は死とともに生きた。死の道程を辿った生の姿を抉ること。学徒の手記は、読む者にそのことを迫る。

Ⅰ　戦没学徒

1943年10月初め、東條内閣は、在学徴集延期臨時特例を公布した。26歳まで延期されていた（旧制）大学・高校・中学・専門学校の（理工系・教員養成課程を除く）学徒の徴兵猶予が廃止され、徴兵年齢が満20歳とされた［北村、2002：129－130］。学徒は、同月21日の明治神宮外苑競技場（および全国各地）での出陣学徒壮行会（東京で25,000人動員）を経て、徴兵検査を受け、12月１日陸軍に、９・10日海軍に入隊した。同月下旬には、兵役法が改定され、徴兵年齢が満19歳となった。こうして、アジア太平洋戦争に出陣した学徒は、30万人に上った［北村2002，op.cit.］。学徒の一部は、特別攻撃隊員となって、戦闘機もろとも敵の

艦隊に突撃していった。その戦死者は、（学徒兵と非学徒兵を合わせて）海軍2,527人、陸軍1,388人で、計3,915人に及んだ［記念会、1995：19－20］[1]。戦死・殉職・戦病死・餓死・行方不明の学徒の総数は、不明である[2]。

学徒の戦死者数だけでなく、戦死の場所や状況、徴兵から戦死に至る生活・戦闘歴等についても、個別の事例を除いて、不明である。とはいえ学徒の場合、他の兵士に比べて、遺された手記が多い。（生還した学徒の手記も多い）。とくに特攻隊員には、多くの遺書が遺されている。出撃して生還した隊員や、待機で終わった隊員の手記（戦記物も含め）も多い[3]。学徒は、書くことで生と死が思考できる知識人であった。ところが、これに対して、学徒の手記についての（学術）研究は、きわめて少ない。初学者はその事実に驚かされる。ここで、その中の2つの研究に注目したい。それは、森岡と大貫の研究である［森岡、1993：1995］［大貫、2003：2006］。森岡は、手記解釈の「重ね焼き法」（資料を重ね合わせて用いる方法）を用い、若者（とくに特攻隊員）の手記を基に、「散華の世代」（1920－23年生れ）を中心に、コーホート（同じ歴史的体験を共有する年齢集団）と戦争体験、戦友「コンボイ」（死の道連れ）の情緒安定機能、死の蓋然性・時間的近さ、生死の葛藤の解消法、国家の要請に応じる人間類型等の断面から、学徒の生と死の苦悩（以下死の苦悩）を分析した。大貫は、天皇・国家・戦争と「桜」のシンボリズム分析を基に、「自然化」（死が当然視されていく過程）、「伝承の再製」（伝統が国家主義的に再解釈される過程）、誤認（一つの象徴から複数の意味が導出される過程）等の概念を用い、学徒（とくに特攻隊員）の、死の苦悩のイデオロギー的分析を行なった。いずれも力作である。筆者も、これらの研究から多くの示唆を得た。その上で、筆者は、学徒の意味世界の分析を進めるために、さらに次の2点を明確にすべきだと考える。一つ、学徒が、そもそも、徴兵・特攻隊志願・出撃に応じたという事実を、彼らの意味世界分析の起点とすべきだということ。彼らの死の苦悩はここから始まった。それは、事実においても、思想においても、彼らの死の苦悩の一切を決した。

二つ、戦死における散華の意味を十分に分析すべきだということ。これも、意味世界の分析にとって重要である。学徒に、自由主義者が少なくなかった。先行研究は、彼らの死の苦悶の分析に傾斜した。その結果、国家主義の学徒の分析が手薄となった。しかしその分析は、事実においても（学生の多数派）、思想においても重要である。……本稿は、一つ目の問題に焦点を当てる。

Ⅱ　資料

本稿は、戦没学徒の意味世界の分析を試みる。課題は3つある。一つ、学徒が戦死を受容した思想／心情（イデオロギー・信条・心情を包括する観念体系）の過程を分析すること。二つ、戦死を受容した思想／心情の構造を分析すること。三つ、学徒の死に様（死に臨む態度）を分析すること。

その前に、本稿が用いる資料について説明する。戦没学徒の手記の内、本稿では、全国の戦没学徒の手記を収めた『新版　きけわだつみのこえ』（第一集）［記

念会、1995]、『新版　第二集　きけわだつみのこえ』[記念会、2003]（以下これらを『わだつみ』と表記）を用いる。その資料を、他の書（『はるかなる山河に』等）で補充する。『わだつみ』には、第一集が74人、第二集が49人と、延162人の学徒の手記が収められている（2冊に重複する者10人、特攻隊員15人[4)]）。第一集の初版は1949年に刊行され、その後版を重ね、1995年の新版に至る。第二集は、最初1962年に『戦没学生の遺書にみる15年戦争』（光文社）として刊行され、その後版を重ね、2003年の新版に至る。第一集旧版では、「反戦」が編集方針とされ、軍国主義を肯定するような手記は除外された。手記の内容も、同じ方針で編集された。しかしこの編集方針は、その後批判に晒された。「ありていにいえば、『わだつみ』編集方針の基本的姿勢に欠けていたものは、死者の言葉を死者の言葉のままに、まるごとを聴こうとする『生者』の姿勢の謙虚さなのであった」[安田、1967：111]。保阪も、『わだつみ』は「追悼の書」なのか「反戦の書」なのかと問い、同書を政治化して読むこと（後者）の危険を戒めた[保阪、2002：72]。新版では、この批判が意識され、編集者の恣意を避け、「戦没学生の一人ひとりの全体像が再現されるよう」[記念会、1995：499]に細心の注意が払われた。『わだつみ』編集の経緯については、新版の「新版刊行にあたって」に詳しい。しかし、新版に対する批判も出されている[保阪、2002：7章]。もとより、掲載手記の選別や手記内容の編集は、戦没学徒の全体像を毀損するという点で、望ましくない。しかしここに、3つの留保がある。一つ、学徒の手紙は厳しい軍の検閲を受けたということ。ゆえに、原本がつねに学徒の本心を告げているとはかぎらない。ただしそれは、検閲を受けた手記は資料価値が減じる、ということではない。その逆である。「本書に収めた諸記録は、（検閲のために―筆者）きわめて不完全な表現をよぎなくされながら、まさに、その不完全さを通して、ずっしりと重い人間的内容の無限の豊かさ切実さを示している」[記念会・この本の新しい読者のために、1995：479]。二つ、どんな企画であれ、学徒の手記をすべて網羅することは不可能だということ。そこにはかならず選別が入る。三つ、選別や編集でどれほど全体像が毀損されたとみるかは、解釈の問題だということ。解釈はつねに主観的な行為である。こうして、選別や編集の問題性は程度の問題となる。ここではこれ以上、編集をめぐる議論に立ち入らない。というのも、まず、手記の原本に当たり、選別と編集の足跡を確認する術がないからである。ゆえに、本稿の分析には限界がある。次に、より積極的に、第一集・第二集の新版によっても、戦没学徒の意味世界の分析がおおむね可能だからである。「細心に読んでいくならば（軍国主義的な表現や言葉さえも―筆者）二書（『わだつみ』―筆者）の到るところにみちみちている」[記念会・旧版あとがき1995：488][5)]。

Ⅲ　死の苦悩

「死にたくないと言ふ氣持それだけが本當かも知れぬ」[東大、1947：44]。戦闘を控えて、出撃を前にして、学徒は死と対峙した。その苦悩は、どのようなものだったろうか。死は孤独であり、不安であり、恐怖である。人間はだれも、死

の苦悩を免れることはできない。だからそこには、苦悩の軽減を図る人間の跪(もが)きがかならずある。それは、散華を美とした国家主義の学徒も例外でなかった。この認識が、学徒の苦悩分析の原点である。学徒の不幸は、死をも強いる軍事国家に生きたことであった。彼らに、徴兵と戦死（の予感）は、（ほとんど）不可避なことであった。「抵当にされた俺の生命、明けくれ湿っぽい質やのくらに憔悴している」[記念会、1995：118]。ならば、その運命をどう受容するのか。どんな理由で死ねばいいのか。学徒は、苦悩を軽減するため、納得できる死の意味を模索した。

死の苦悩は、4つの要因に規定される。一つ、死の蓋然性、すなわち、戦死の確率である［森岡、1993：61］。戦死の確率が低い／生還の確率が高ければ、死の苦悩は軽減される。戦死の確率が高い／生還の確率が低ければ、死の苦悩は昂進される。たとえば、特別攻撃の例がある。特別攻撃による戦死には、2つの特徴がある。まず特別攻撃は、ほぼ確実な戦死を結果する。戦死は必死である。次に、特別攻撃による戦死は、殺される（敵に襲われる）死でなく、殺す死（敵に突っ込む）死である。これらの条件のため、死の意味が激しく問われ、その分、死の苦悩は大きくなる。

二つ、（予感される）戦死の時間的な近さである［森岡、op.cit.］。（予感される）戦死が遠い先の場合、死に臨む態度に余裕がある。戦死の蓋然性も小さくなる。その分、死の苦悩は軽減される。（予感される）戦死がすぐ先の場合、死に臨む態度に余裕がない。戦死の蓋然性も大きくなる。その分、死の苦悩は昂進される。ここでも、特攻隊員の例がいい。学徒は、特攻隊員に志願した時、戦死が身近なものになった。出撃を指名された時、戦死が現実のものとなった。指名された瞬間、（大方の）特攻隊員は、心の動揺を来たした。いわば、死の苦悩の急性症状に陥った。

三つ、死の苦悩は、生の意味づけに関わる。死の意味は、生の意味のネガである。後者が前者を規定する。いかに死ぬかは、なぜ死ぬかに規定され、なぜ死ぬかは、なぜ生きるかに規定され、さらになぜ生きるかは、いかに生きてきたかに規定される。死の意味から生の意味（死→生）へ、後者から前者（生→死）へ。学徒は、この循環の中で、納得できる死の意味を模索した。「寝られぬままに、生きることと死ぬことと考えた　いざというときには死ぬこともなんでもないそれにもまして生きることのすばらしさも　しみじみとわかるような気がしたそれでもよいのだと思っている」[記念会、2003：55]。

四つ、死の苦悩は、死の意味の中身に規定される。確実な意味が得られた時、死の苦悩は軽減される。そうでない時、死の苦悩は昂進される。他方、死の意味の中身は、学徒が生きた社会条件に規定される。まず、思想／心情である（その中身の分析は次節で行なう）。次に、思想／心情は世代に規定される（いかなる時代に生きたか）。さらに、思想／心情は、知的境遇に規定される（いかなる学歴や家庭環境にあったか）。

これらの要因によって、学徒の死の意味づけは、各人各様となった。学徒は、

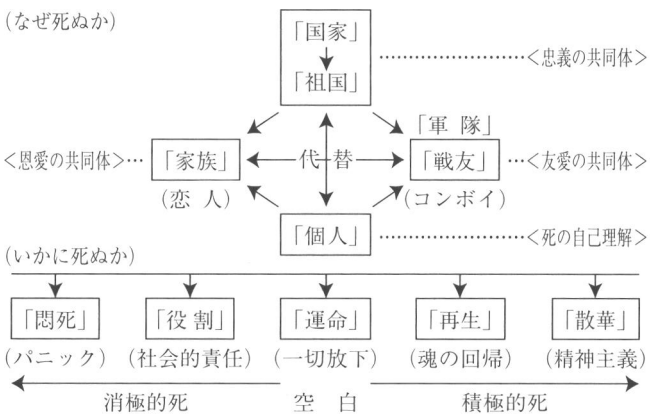
死の直前まで迷想した。それは、国家主義の学徒も同じであった。その場合、迷想を抜け、死の意味を獲得する過程が、他の学徒より短かっただけである。人間、とくに人生の大半を未来に控え、生の活力に溢れた若者が、（予感された）死を受容することは、容易でなかった。

特攻隊員の戦死が、「犬死」と言われたりする。そこには、特別攻撃の軍事的な無謀や、若者に無残な死を強いた軍への非難がある。とはいえ、死に至る若者の苦悩が軽んじられていい、ということにはならない。死は厳粛で重い事実である。死はつねに必死の生である。「いずれも後世においてその死を犬死という名で呼ぶことはできぬ。死においてはすべてが同じく、尊厳の死として語りつづける」[白鷗遺族会・解説、1992：349]。ただしそれは、特攻隊員の死を聖視することではない。彼らは「軍神」ではない。

Ⅳ　死の意味の構造

学徒は、（予感される）死を、具体的に、どのように意味づけたのか。彼らの手記に、その思想／心情を正確に読み取ることは、容易でない。ここでは、『わだつみ』から、死の意味（づけ）を構成する鍵項目を抽出し、それらを関連づけて、学徒の意味世界の一つの解釈図式としたい。図１を見られたい[6)]。

［図１］死の意味（づけ）の構造



1　学徒は、<忠義の共同体>に戦死の意味を求めた。忠義の対象は、「国家」と「天皇」である。「御国のために」「天皇のために」は、国家が学徒を戦場に駆り、戦死を至高の美とした時代思潮であった。「いよ〳〵戦線に征く事になるかも知れぬ。一死報公。唯々天皇陛下萬歳、祖國よ、とはに安かれと祈りて死に赴くのみ」[東大、1947：40]。その場合、学徒には、「国家」は具体的に、私を育み、私を慈しむ縁者が住む、優しく美しい「祖国」として観念された。「家郷ニハ、ナツカシイ日本ノ歴史ノ血脈ト美シイ日本ノ風土ガアツタ。ソレ

ラノモノヲ胸奥二刻ミ込ンデ、戦場ニ立ツコトガ出来ルノヲ幸福ダト思フ」[東大、1947：53]。

「祖国」は「国家」の感性的表象であった。「天皇」は、「祖国」を与え、「国家」を統べる超越者であり、救済者であった。「天皇」は、「国家」の人格的（「神」的）な主体であった。戦争に負ければ、敵の侵略を許す。そうなれば、愛する「祖国」が蹂躙される。ゆえに「祖国」すなわち「国家」は、護られなければならない。そのためには、「子」（臣民）である私は、「親」である「天皇」の命に服さなければならない。兵士が今わの際に叫んだ（とされる）「天皇陛下万歳」とは、「祖国万歳」の意味であった（「天皇陛下万歳」と叫んで死んだ兵士などいなかったというのは、根拠のない風説である。そのような兵士がいたからこそ、悲劇が深かった）。

2　「祖国」の中心には、＜恩愛の共同体＞の「家族」があった。「家族」とは、私の揺り籠であり、避難所であり、魂が帰る宿であった。最愛の人々がそこにいる。学徒は、「家族」を護るために戦場に赴いた。「家族」を護る、には2つの意味があった。まず、戦争に負け、敵に侵略されると「家族」が酷い目にあう。「（中国人が殴打されるのを見て―筆者）戦に敗れたら日本人が敵国からこういう目に合わされるのだ。絶対に戦さにだけは負けてはならぬ」[記念会、1995：90]。次に、私が徴兵や戦闘を拒否すれば、「家族」が非国民として迫害される。戦死＝孝行の観念が、地域のサンクション（共同体に対する道義的責任）を介し、国民の間に定着していた［森岡、1995：133］[7]。「家族」は、国家に人質に取られている。学徒はこう考えた。ある学徒は、だから「祖国」「国家」、ひいては「天皇」のために戦うのだ。「皇国日本に於ては忠孝は一本であります。大君に忠節を捧ぐる事之より大なる孝は無いと信じます（傍点―筆者）」[辺見、2002：248]。ある学徒は、「国家」や「天皇」のために戦うのではない、「家族」（だけ）のために戦うのだと考えた。「はっきり言うが俺は好きで死ぬんじゃない。何の心に残る所なく死ぬんじゃない。国の前途が心配でたまらない。いやそれよりも父上、母上、そして君たちの前途が心配だ。心配で心配でたまらない」[記念会、1995：362]。

「家族」の中心には、母と父がいた。次に姉と妹がいた。次に「家族」同然の恋人（片思いの人も）がいた。最後に、兄と弟がいた。既婚の学徒には妻と子がいた。母・父は厚恩の人であった。学徒は、御国のためとはいえ、報恩を果せず先立つ不孝を母・父に詫びた。姉と妹は母の付添人であり、母と私の情愛を見届ける人であった。恋人は人生の同伴者（になるべき人）であった。兄は父の代行者であり、弟は私の代わりに「家族」を護る人であった。妻は私の子の未来を託す人であった。子は私の夢を託す人であった。

お母さん、先立つ不孝をお許し下さい。多くの学徒は、最後の手記にこう書いた。軍隊生活の隔絶感が、母に対する学徒の愛慕を募らせた。特攻隊員は、出撃して敵艦隊に向かう途中、戦闘機から最後の無電を送った。「オカアサン

サヨウナラ」「オカアサン　オセワニナリマシタ　ユルシテクダサイ」[森岡、1993：287]。では、なぜ父でなく、母だったのか。母は情愛の器であった。父は倫理の教師であった。優しい母と厳しい父。殺伐とした軍隊や戦場にあって、また、死を目前の孤独と恐怖にあって、学徒は、倫理も規範もかなぐり捨てて、父でなく、母に縋りついた。学徒が父親に宛てた手紙には、堅苦しく道徳的な内容のものが多かった［大貫、1994：292］。母親や妻や恋人に宛てた手紙には、率直な内容のものが多かった。「父上様。何の孝行も出來ずに了つた事を御詫び致します。せめて陛下の赤子として戰線の野に倒れた事を孝行とお思ひ下さい」［東大、1947：40］。「先週の日曜、やはり便所の中で母へ手紙を書いた時は涙がとまりませんでした。母には元気で張り切っているとは書きましたが、僕の気持は死人同様のヒ惨なものです」［記念会、1995：88－89］。

3　学徒にとって、「戦友」は特別の存在であった。「戦友」は、死の苦悩を見届け、死の意味を共有し、死自体をともにする仲間（コンボイ）であった。ゆえに学徒は、「戦友」とともに＜友愛の共同体＞を作った。「戦友」の親密な関係は、また、軍隊自体によって強化された。一つ、軍隊は、建前からして、自らを兵士の運命共同体と考えていた。陸軍内務令には、次のようにあった。「兵営は軍の本義に基き死生苦楽を共にする軍人の家庭にして兵営生活の要は起居の間軍人精神を涵養し軍紀に慣熟せしめ強固なる団結を完成するにあり」［Homepage，a］。二つ、軍隊は、「家族」や「友人」との＜恩愛の共同体＞から隔絶された、孤独な世界であった。学徒の孤独感は、死の予感によって強まった。死は、愛する者との永遠の別れを意味する。愛する人々ともう会えない。その時、学徒のこの剥奪感を埋めたのが「戦友」であった。「戦友」は、＜恩愛の共同体＞を代替する情緒安定の機能を担った。三つ、軍隊は、出自と地位から成る厳格な階級社会であった。学徒は、軍隊経験をもたない新参者であった。軍隊は、軍人勅諭の「精神」を上官が部下に、古参兵が新兵に（暴力的に）注入する場であった。学徒は、兵学校出身の古参兵によって厳しく教育された。また学徒は、特典により、庶民兵（庶民出身の兵）より早く地位を昇進した。陸軍では、入営後「ただちに一等卒（兵）、おおむね二ヵ月後に上等兵、おおむね四ヵ月の後に伍長、おおむね六ヵ月後に軍曹、おおむね八ヵ月後に曹長の階級」に進級した［北村、2002：131－132］。この制度が、兵学校出身の兵の間に学徒兵に対する妬みを生んだ。それに学歴コンプレックスが重なった。

上官や古参兵は、学徒兵を虐待した。学徒は、それを「排除」と受け止めた。もともと軍隊に批判的だった学徒は、その恨みを一層強めた。そして（その反動として）、同じ境遇の「戦友」に対する親密感を高めた。特攻隊員の手記に、軍隊の腐敗を批判したり、部下を先に死地へ赴かせる上官への不信を露わにした文が、散見される（このような上官批判は、少年兵出身の特攻隊員の間でも強かった［桑原、2006］）。死を目前に、上官に対する鬱憤は頂点に達し、「戦友」に対する愛着も頂点に達した。「私は祖国のために、我が十三期のために、

更に先輩の学徒出身の戦士のために、最後には私のプライドのために生きそして死ぬのである。帝国海軍—その意味するところは江田島出身のある部分の士官によって代表される—を呪いながら」[記念会、1995：392]。

4　死の意味を、自己の内面へ哲学的に問う学徒もいた。それは、死の意味を＜個人＞から問うて、＜死の自己理解＞をめざす学徒であった。彼らは、死を自らの生の解と考えた。ゆえに、死の意味（「なぜ死ぬのか」）を生の意味（「どう生きてきたのか」）に遡った。彼らは、＜忠義の共同体＞への同化を拒絶し、国家と軍隊を拒絶した。また、＜恩愛の共同体＞や＜友愛の共同体＞さえ、彼らにとって、死の意味の解にならなかった。「世はまさに闇だ。戦争に何の倫理があるのだ。大義のための戦、大義なんて何だ。痴者の寝言にすぎない」[記念会、1995：219]。彼らは、＜近代的死＞の探求者であった。彼らの中にはキリスト教徒もいた。キリスト教徒は、神を彼岸の救済者とする＜信仰の共同体＞に住む人々であった。彼らは、神以外に絶対者を認めず、神との孤独な対話に生きた。その意味で、彼らも＜死の自己理解＞をめざす人々であった。

こうして彼らは、＜他者＞（権威や「共同体」）から自由であった。彼らの手記には、批判的知性が輝いている。読む者は、その卓抜な言葉に感嘆する。「『軍服着た間は学問を忘れたら』との忠告に、『軍服着たって学徒で候』と返事した。知性が私の武器である」[記念会、2003：24]。「学徒は真理の使徒である。学徒の意図は国家の真実を護ること。学徒の魂は真実のない国家よりも、国家のない真実を求める」[記念会、2003：25]。このような知性は、軍隊（上官）の権威主義とことごとく衝突した。学徒は、さまざまなかたちで抵抗した。それがまた、彼らの知性に磨きをかけた。彼らは、軍隊と戦争の非人間性の中で、自らの知性が堕落することを恐れた。「軍隊生活において私が苦痛としましたことの内で、私の感情—繊細な鋭敏さ—が段々とすりへらされて、何物をも恐れないかわりに何物にも反応しないような状態に堕ちて行くのではないかという疑念ほど、私を憂鬱にしたものはありません」[記念会、1996：34]。「（私には—筆者）まだ顔を赤らめる感情がある」[記念会、1996：112]。

5　学徒の死の意味は、＜忠義の共同体＞＜恩愛の共同体＞＜友愛の共同体＞＜死の自己理解＞から構成された。それは、（一つの）理念的図式でしかない。学徒はだれも、これらの理念を、多かれ少なかれ、合わせ持っていた。そして、これらの理念の間を往来した。その往来の過程こそ、死の苦悩の軌跡であった。最初からどれかの理念に純化していた学徒などいない。死の苦悩は、死の直前まで続いた。死を受容することは、それほど困難なことであった。戦死を散華と考えた学徒もいた。彼らの心底はどうだったのか。他者の心の底は測りがたい。しかし、最初から「散華こそ本望」と思っていた学徒はいない。彼らも、国家主義者になった人々である。「事實私は生死を超越したといひながらつい先頃迄死生観といふ問題が頭の中から離れたことはありませんでした」[東大

1947：178－179]。

死の意味を獲得した（と思われた）過程は、学徒によって長短があった。一般に、＜忠義の共同体＞を選んだ学徒は、その過程が短かった（と思われる）。＜死の自己理解＞を選んだ学徒は長かった（と思われる）。とはいえ、それは相対的な差異でしかない[8)]。ただし、＜忠義の共同体＞を選んだ学徒と、＜死の自己理解＞を選んだ学徒の間で、死の意味の模索は分岐した。死の意味を、「国家」から演繹する論理と「個人」から導出する論理は、原理的に相容れない。他方、大方の学徒は、＜恩愛の共同体＞と＜友愛の共同体＞に、死の平安を見出した。＜忠義の共同体＞の学徒はもとより、＜死の自己理解＞の学徒も、多くは、最後は＜恩愛の共同体＞と＜友愛の共同体＞に、死の孤独を癒す避難所を求めた。それほどに、「家族」と「戦友」の情緒安定の機能は大きかった。

V　思想の陥穽

建前と本音

特攻隊員の死に様について、対立する言説がある。一つは、彼らは、潔く颯爽と出撃していったというもの。「当時の散華していかれたかたがたの気持はもっと淡々とした、もっと清純なものであった」[白鷗遺族会・発刊の言葉」、1992：351]。もう一つは、彼らは、最後まで生に執着し、苦悩の内に出撃していったというもの。しかしこれらの言説は、いずれも真実であった。それは、いかなる意味においてなのか。次は（一つの）解釈である。死ぬのは嫌だが、出撃は拒否できない、ならば、せめて軍人らしく出撃しよう。それでこそ英雄になれるのだ。こうして彼らは、どうにか笑みを湛え、敬礼して出撃することができた。しかし、この解釈には続きがある。もし特攻隊員が、出撃を完全に無意味な強制と考えていたなら、はたして彼らは、颯爽と出撃できただろうか。彼らは、なにほどか、戦死を納得（覚悟）していたからこそ、颯爽と出撃できたのではなかろうか[9)]。ここに、死の苦悩をめぐる２つの問題が生起する。一つ、建前と本音の問題である。特攻隊員の中で、建前（散華の美）と本音（生の執着）が葛藤していた。彼らは、建前が本音を抑制できたから、颯爽と出撃できたのだろうか。そうではない。本音の中ですでに、（なにほどか）「散華の美」を受容していたからこそ、彼らは、颯爽と出撃することができた。人間は、死に臨んで自らを完全に欺くことはできない[10)]。「私は本音を言えば死にたくなかったし、怖くなかったと言えばうそになる。しかし、軍人である。命令は鉄の定めだ。哀しい運命とただ諦めるより仕方がなかった（傍点―筆者）」[桑原、2006：354]。（元）特攻隊員の彼らは、戦死を諦めることができた。ならば、なぜ彼らは、心ならずとはいえ、戦死を受容することができたのだろうか。その解は、彼らの思想／心情、すなわち、死の意味のあり様にある。これが二つ目の問題である。

＜忠義の共同体＞を選んだ学徒も、死の意味づけに苦悩したことは、前述した。しかし、この場合はまだ、本音を抑制することは、他の学徒より、容易であった

(かもしれない)[11]。<友愛の共同体>を選んだ学徒も、容易であった（かもしれない)。彼らは、上官に怒りを、戦友に愛着を抱いていた。そして、「先に潔く征った先輩に続け」という使命感が、彼らを死に駆り立てた。これに対して、<恩愛の共同体>を選んだ学徒は、死の苦悩を抑制することは難しかった（かもしれない)。彼らにとって、「家族」「母」は生の象徴であった。しかし最後に、彼らは、彼岸における「家族」「母」との再会を信じた。ゆえに彼らは、死の苦悩を、どうにか抑制することができた。

融和的自由主義

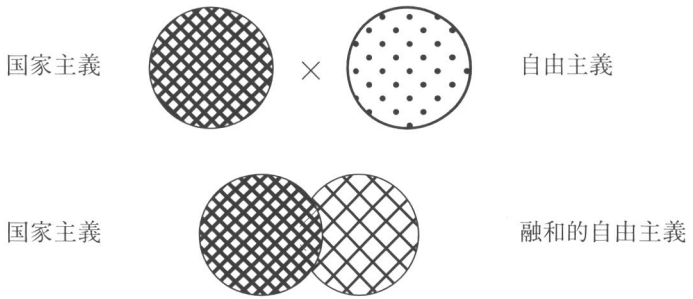
問題は、<死の自己理解>を選んだ学徒であった。<死の自己理解>とは、死の意味を<他者>（「国家」「天皇」「家族」「戦友」等の「共同体」）との絆に求めず、専ら自己の内面に求める思想／心情をいう。それは、国家の権威や強制を認めず、価値の基準を自らに据え、自由と自立を生き、<近代的死>に到達する自由主義（近代知としてのマルクス主義を含め）をいう。では、<死の自己理解>を選んだ学徒は、この自由主義を実践できただろうか。否である。なぜなら、自由主義の学徒は、国家の徴兵・志願・出撃の要請に応じていた。「学徒兵には法を破ることを恐れまいという精神がなかった」[田中、1968：13]。もとより彼らには、徴兵の意味がよく分かっていた。「まだ暑さの去らない街に毎日、出征兵を送る万歳の声が続いた。『征きたいでしょう』。ときどき人に訊かれる。私は黙って笑っておく」[記念会、2003：23]。そのような生き方は、彼らの思想／心情と矛盾する。ゆえに、彼らの死の苦悩はここから始まった。「若者たちはひとたび徴兵された時点で、すでに後戻り出来ない一線を越えており、極めて無力な立場に置かれたことを十分認識していた」[大貫、2006：8]。ここで、このような、彼らの不徹底な生き方を「融和的自由主義」と呼ぶことにしよう。自由主義の学徒が、徴兵・志願・出撃を拒絶せず、かつ、敵艦隊に向けて颯爽と出撃できた思想／心情の根拠は、彼らが国家主義と融和していたことにある[12]。大貫は、自由主義の学徒は、行動では国家主義を再生産することになったが、思想としてそれを信奉していたわけではなかった、とした[大貫、2003：10]。そうではない。彼らは、国家主義（に繋がる考え）を、意識的・無意識的に自らの思想に取り込んでいたからこそ、そのように行動できた。では、なぜ彼らは、国家主義と融和することができた（してしまった）のか。理由は2つある。図2を見られたい。

一つ、彼らが、国家主義が圧倒する時代に学んだ世代だったということ[13]。彼らにとって、国家主義は思想形成の与件であった。彼らは、無意識的・意識的に、軍国主義の「誤認」[大貫、2003：24]、すなわち、国家主義の言説を自由主義に引き寄せて読み替えた[14]。腐敗した軍国日本を破壊する、日本を欧米資本主義の毒牙から護る、アジアを西欧の植民地支配から解放する、そのために私は戦う、そして未来の日本の捨石になる。彼らは、こう考えて徴兵に応じ、特別攻撃隊に志願した。「悠久の大義に生きるとか、そんなことはどうでも良い。あくまで日

本を愛する。祖国の独立自由のために闘うのだ」[記念会、1995：374]。

二つ、彼らが、（予感する）死の孤独と不安に耐えることができなかったということ。彼らは、最後まで＜近代的死＞を実践できなかった。彼らは、国家主義に怒って憤死するのでなく、家庭と母に安息を求めて死んだ。そこに、国家主義に勝てない陥穽があった。彼らは、家庭と母を、敵から護るために戦った。しかし家庭と母を護るとは、「祖国」を護ることであり、「祖国」を護るとは、「国家」を護ることであった。学徒は、この連鎖の中で、家庭と母を「国家」に人質に取られていた。

［図２］国家主義と融和的自由主義



こうして学徒は、融和的自由主義者になった。日本に、国家主義と対決する自由主義はあった。反戦運動もあった。徴兵を拒絶した学徒もいた。軍隊内で抵抗する学徒もいた[15]。しかし彼らの抵抗は、弾圧されて潰滅した。敗北の挫折は、学徒を深く傷つけた。「現実によって転向を強いられるような観念は真の観念ではない。それは、本来現実を基礎にしなかったために、遊離した観念的な観念にすぎなかったのだ。（それが今までのインテリの弱さの正体であった）」[記念会、2003：198]。その後には、虚無主義が残った。「あと、死ぬまでに俺の心はどこまで荒んで行くことか」[記念会、1996：282]。もう一つ、融和的自由主義が残った。学徒は、徴兵・出撃・戦死を受容していった。自由主義者にとって、戦死は悶死（「他殺死」）[記念会・旧版序文、1995：10] であった。国家主義者にとって、戦死は散華であった。しかし、融和的自由主義者にとって、悶死と散華は、同時に経験される、戦死の二側面であった。特攻隊員は、出撃前夜に、若き死に涙しながら、翌朝に、颯爽と出撃していった。ここに、日本近代の呪縛がある。日本の自由主義は、多くの場合、（国家主義に繋がる）集団主義と訣別できなかった。＜恩愛の共同体＞と訣別できなかった。ゆえに、「個の自立」が達成できなかった。その意味で、融和的自由主義は、学徒に凝縮され、かつ学徒を超えた日本の思想であった。「あの戦争には、＜近代日本そのものの姿＞と＜日本人の国民的性格＞が象徴的にあらわれている」[保阪、2002：17]。私たちは、学徒の、沈鬱な死の檻の中で時代を恨み続けた、痛々しい知性に涙する。「明日は自由主

義者が一人この世から去って行きます。彼の後姿は寂しいですが、心中満足で一杯です」[記念会、1995：19]。

Ⅵ　死に様を求めて

学徒に死は不可避であった。「生への執着は、生への力強き肯定にまでは高められませんが、しかもなお肯定はそのまま刑場に通ずる“今”の道でありました」[記念会、1995：167]。その苦悩は、死の直前まで続いた。そして、試行錯誤の時間切れの時が来た。ある日、ある学徒は、戦闘の只中にある戦場へ送られた。ある学徒は、特別攻撃の出撃を指名された。「私の時間は泣いているのに私の時計は笑っている」[記念会、1995：171]。学徒は死を前に、いかに死ぬかの覚悟を迫られた。学徒は、あれこれと死を思い描いた。「いかにして巧みに死ぬるか、これのみが今の私たちのほんとの気懸かりである」[記念会、2003：370]。（優柔不断の生と死の迷いを断って）一気に死にたい。美しく死にたい。安らかに死にたい。「満足して死んでゆきたい、自分の死に誇りを持って死にたい。死の解決はただ一つ。自分の信ずるところに満足して死ぬことである」[記念会、1995：218]。死の覚悟（いかに死ぬか）は、死の意味（なぜ死ぬのか）に規定される。前者のために後者を、後者のために前者を反芻する。両者の問いは同時的で、関係は多様である。では学徒は、いかに死んでいったのか。ここで、その死に様を５つに分類する。それは一つの整理である。学徒はだれも、複数の死に様を往来した。図１の下段を見られたい。ある学徒は、生と死の狭間で、「パニック」に陥って「悶死」した。「（出撃して一筆者）敵艦を見つけてもそこには突入せず、近くの水面に着陸しようとする者も多かった」[大貫、2006：16]。それは絶望の死（消極的死）であった。「『生きて帰る』　俺にはまだまだ山ほど人生がある。いや俺ばかりではない。生きとし、生けるものすべてだ。それがみんな死の中で育ち、ほんものの死へ這入っていかなくてはならぬとは」[記念会、1995：126]。ある学徒は、「主体的役割人間」（任務を意志的に遂行する人間類型）[森岡、1993：208] に徹し、時代の「役割」を遂行した。それは儀礼の死（消極的死）であった。「偶然置かれたこの日本の土地、この父母、そして今迄に受けて來た學問と。鍛へあげた体とを、一人の學生としてそれらの事情を運命として擔ふ人間としての職務をつくしたい、…（中略）…お互に生れもつた運命を背に擔ひつゝ、お互夫々きまつたやうに力一杯働き、力一杯戰はうではないか」[東大、1947：17]。ある学徒は、「一切放下」（一切の執着を捨て去ること）[星野、1966：43] の心境で、死を「運命」に託した。それは、苦悩自体を放擲した「空白」の死であった。「絶体絶命の立場に私は居る。死ぬのだ。潔ぎよく死ぬ事に依ってこのわだかまった気持のむすび目が解けると云うものだ」[白鷗遺族会、1992：50]。ある学徒は、「魂の回帰」という「再生」を誓った。それは、愛する人々との再会を信じる愛慕の死（積極的死）であった。「俺は君たちの胸の中に生きている。会いたくば我が名を呼び給え」[記念会、1995：363]。ある学徒は、軍人として「散華」する「精神主義」に死を求めた。それは、苦悩を幽閉した潔

身の死（積極的死）であった。「出撃後いまだ一日に過ぎざれど、我が胸にあるはただ、七生滅敵の、洋々たる敵愾心のみ。　しかり、洋々たる心なり。何の感動も感情もなくして、ただ膺下よりさわやかに上騰しきたるがごとき静かなる落ちつきなり」［記念会、2003：372］[16]。……これが、学徒の死の苦悩の結末であった（以上は素描にすぎない）。

Ⅶ　研究の課題

本稿は、『わだつみ』の戦没学徒に対象を絞り、彼らの死の苦悩の過程、死の意味の構造について、一つの解釈を試みた。本稿は、筆者の「戦争社会学研究１」である。本稿は、さらにいくつもの課題に続く。未着手の問題は多い。手記解釈の方法をめぐる問題（史実とは何かをめぐる問題）、散華を美とした国家主義の学徒の問題。日本近代論としての思想／心情をめぐる問題。学徒兵と庶民兵の意味世界の異同をめぐる問題。日本人学徒と外国人学徒［Witkop、1933］の国際比較をめぐる問題。日本兵のアジア人加害の認識をめぐる問題。さらに、特攻隊員の意味世界に特化した分析課題もある。これらの問題が一つひとつ解明される中で、歴史の「真実」が発掘され、確証されていく。研究は始まったばかりである。

戦没学徒の思想／心情は、現代日本の思想状況を問うている。本稿は、その一つの批判的省察として書かれた。

［注］

1）アジア太平洋戦争における、陸海軍の特攻隊員の戦死者は6,000人を超える（内特攻隊員3,000人、その内朝鮮人11人）。刀や手榴弾で敵を奇襲する斬り込み隊も、特別攻撃に等しい。部隊が壊滅して特別攻撃の事実自体が不明になったり、（沖縄で）民間人が対戦車特攻を強制されたり、また何をもって特別攻撃とするかによって、特別攻撃による戦死者の数は増減する［Homepage，b］。

2）「殉職」は、兵役中の事故死を指す。特別攻撃隊では、特別攻撃の訓練で、地上に激突する寸前で機体を上昇させることができず、地上に激突したという類の事故が多かった。「戦病死」「餓死」は、南方戦線の学徒に多かった。「行方不明」には、輸送船が撃沈されて死んだ学徒が多かった。

3）特攻隊員の手記が多い原因として、次のような事情があった。自分の死期を予見できたこと、出撃基地がおもに内地だったので、手記が残りやすかったこと、同じ戦隊から戦死者を多く出したので、手記が出版されやすかったこと［中村、2006：302］。

4）特攻隊員の数は、著者略歴の「戦没の事由」欄の、「特別攻撃隊員」「回天特別攻撃隊員」を数えたものである。この他、「殉職」にも特攻隊員が含まれるはずである。

5）『わだつみ』と『戦没農民兵士の手紙』が比較され、学徒兵と農民兵士の死生観の差異が指摘されたりする。しかし、『わだつみ』に農民兵士に通底する死生観を読み取ることは、おおむね可能である。学徒の意味世界には、出自を越えた普遍性がある［記念会・旧版あとがき、1995：479－480］。「偏った属性の人々によって書かれた遺書でも、同じ状況にあった人々の心のうちを代弁するところが多い」［森岡、1993：22］。また学徒は、

とくに第二集で、アジア（とくに中国）での戦争体験を多く記している。ゆえに、アジア民衆との関係の記述について、「本書が欠陥をかかえこむことになった」［記念会・新版刊行にあたって、1995：505］とは思わない。『わだつみ』に、学徒のアジア認識を読み込むことは可能である。それは、想像力と解釈の問題である。

6）高橋は、特攻隊員が戦死を受容できた条件として、次のものを挙げた。(1) 特攻戦死の意味づけ、(2) 任務志向の旺盛な責任感、(3) 死のコンボイとの連帯感、(4) 親きょうだい、(5) パーソナル・コミュニケーションとマスメディアが伝える世論の動向［高橋、2004：60］。本稿は (5) については言及しない。

7）軍隊の便所の壁に、「逃亡したら郷里の人に何と申し訳する」と書いた紙があったという［森岡、1993：151］。また、死ぬことを本命とする、降伏・逃亡は死刑に処する、軍規違反は家族や親類にまで類を及ぼす（連座制）。このような軍隊の制度も、若者の行動を厳しく拘束した［大貫、2006：7］。他方、「名誉の戦死」はムラの名誉であった。たとえば、1941年の真珠湾攻撃で飛行兵として戦死した若者は「軍神」とされ、実家は「軍神の家」とされた［辺見、2003：35］。

8）本稿にみた死の意味の解釈図式は、基本的に、農民兵士［岩手県、1961］や、軍国主義一筋の少年兵にも妥当する。庶民兵や少年兵も、死の直前まで死の苦悩を続けた［桑原、2006］。解釈図式は、階級・世代を越えて適用可能な図式である。「この本の手記は、学生だけの特殊性という面もあるが、同時に、自己の内心を、ついに表現する機会もなく、方法も知らずに、型どおりのことばだけを残して死んでいった無数の将兵、とくに若い兵士たちの代弁にもなっているのである」［記念会・この本の新しい読者のために、1995：479－480］。

9）大貫は、特攻隊員の食事等の世話をしていた元兵士の手紙から、特攻隊員が、出撃前夜に、死の苦悩に荒れた様子を紹介している。「ガンルームでの別離の酒宴設営。明日出撃の若き士官の冷酒の席の酒盛りは、一気飲み!!　ガブ飲み!!　果てはついに修羅場と化して、暗幕下の電灯は刀で叩き落され、窓硝子は両手で持ち上げられたいすでガラガラと次ぎつぎに破られ、真白きテーブル掛布も引き裂れて、軍歌は罵声の如く入り乱れ、灯火管制下の軍隊でこゝガンルームでの酒席は“別世界”。ある者は怒号、ある者は泣き喚き、今宵限りの命……。（中略―筆者）若い尊い青春の身命を捧げる覚悟は決しているものの、散乱のテーブルに伏す者、遺書を綴る者、両手を組みて瞑想する者。荒れ果てた会場から去る者、何時までも黙々と何かを書き続ける者、狂い踊りしながら花壇を叩き毀す者。この凄惨な出撃前のやり場の無い、学徒兵士の心境は余りにも知らされていませんでした。……早朝飛行場に走り昨夜水盃ならぬ冷酒の勇士は日の丸のはち巻も勇ましく爆音高く襲撃!!」（傍点―筆者）［大貫、2003：271－272］。涙を誘う光景ではある。しかし、彼らが翌朝に颯爽と出撃していった姿にこそ、悲劇の深刻さをみる。

10）特攻隊員の志願は、自発の体裁をとったが、実際は強制であった。「だれ一人として“希望”と書いた者もいなければさりとて“白紙”のままで出した者もいなかった。表現は異なれ、皆、判で押したように、『命令のまま』であった。『どうしてどうして正直に本音を書こうものなら、後には陰湿な罰直（制裁）が待っているからなあ―、とても本音は書けないよ』とは、誰彼を問わず発した言葉であった」［桑原、2006：404］。彼らは、「命令のまま」以上に踏み込んで、本音を書くことができなかった。彼らにとって、死より制裁が重かった。これに対して、戦死すれば2階級特進の特攻隊員の遺族に支払われる恩給が、志願の動機の一つだったとする説がある［大貫、2003：266］。しかし、たとえそうであったとして、この場合も、死より恩給が重かったことになる。

11）これは、学徒兵と庶民兵・少年兵の比較としても指摘される。一般に、庶民兵・少年

兵は、より早く＜忠義の共同体＞に同化した。なぜなら、彼らには、自らの境遇を対象化し、死の意味を思考する知の材料が少なかった。ゆえに、より早く死の意味の結論に到達せざるをえなかった。「兵士らはいとも容易に、自分たちを護国の勇士と信じる。我らあっての祖国だと！　我らあっての祖国だと！　それは甘い一つのセンチメンタリズムだ。兵士らの心のふるさとだ。兵士らはその自慰によって青春の浪費を悔やまない」［記念会、2003：186］。

12）融和的自由主義は、朝鮮人学徒の自由主義とはまったく異なった。朝鮮人学徒は、徴兵に応じた学徒を含めて、（その多くは）日本軍国主義と無縁な人々であった。当時、大学教師が、軍隊への（強制的）志願に応じなかった朝鮮人学徒にその理由を尋ねた。すると、彼は次のように答えた。「僕たちは獨立したいのだ。自由意志で逝きたいのだ。此の戰争は日本が勝つても負けても、朝鮮獨立の千載一遇の好機である。僕は日本の戰線に酷使されたくない。犬死したくない。民族獨立の爲の戰争に死にたいのだ。僕は朝鮮を自由にしたい。強制でなく自由意志で生きられる國にしたい」［東大、1947：239］。学徒兵として招集された朝鮮人は4,385人であったが、この内400人以上が、中国との戦闘中に中国側へ逃走を試み、その半分が成功したという［大貫、2003：256］。

13）安川は、学徒がどれほど自由主義的（逆に国家主義的）であったかは、世代により異なるとして、世代を次のように分類した［安川、1997］。①前わだつみ世代（1908－19年生れ。国家主義への批判意識が強かった世代）、②わだつみ世代（学徒出陣の世代）、a．自由主義思想残光期（1920－22年生れ。国家主義へ傾斜し始めた世代）、b.自由主義思想消滅期（1923－25年生れ。国家主義が思想をほぼ制圧した世代）、③少国民世代（軍国主義教育が本格化した世代）。『わだつみ』の学徒の死亡時の平均年齢は24歳であった（全体は18～33歳に分布）［記念会・旧版あとがき、1996：502］。これは、「わだつみ世代・自由主義残光期」に該当する。

14）国家の方も、日本の美やロマンや理想の物語を国家主義的に脚色し、それを、巧妙な（優しく説得的な）シンボル操作によって、国民に注入した。学徒は、無意識の内に、それらを自らの美意識やロマン主義、理想主義に刷り込んだ［大貫2006:46-47］。東条英機首相は、1943年10月の出陣学徒壮行会で、学徒に次のように訓示した。「御国の若人たる諸君が勇躍学窓より征途に就き祖先の遺風を昂揚し仇なす敵を撃と滅し、皇運を扶養し奉るの日は来たのである……その燃え上がる魂、その若き肉体、その清新なる血潮……この一切を大君の御為に捧げ奉るは皇国に生をうけたる諸君の進むべきただ一つの途である。諸君が悠久の大義に生きる唯一の満なのである……懸軍万里、を仰ぎ奉りて皇道宣布のに参加の光栄を荷はるる諸君が……その責任を全うせられんことを切に祈念して……壮行の辞と致す次第である」［わだつみ会1993:24］。文学的な修辞に満ちた言葉である。それは、ヒトラーの力強い演説を髣髴とさせる。

15）治安維持法（1925年制定）で逮捕された人数十万人、検事局に送検された人75,681人、拷問で死んだ人65人、獄死した人114人、獄中で病死した人1,503人であった［Homepage，c］。人びとはさまざまな方法で戦争を拒絶した。「①（死亡診断書の偽造による徴兵のがれや「身体毀損作戦」による召集解除などの）徴兵そのものの忌避と（灯台社の戦時下抵抗で知られる）兵役の拒否、②幹部候補生試験拒否または意図的不合格による戦争への積極的加担の拒否、③「戦陣訓」に背いての（部下を引き連れた場合を含む）敵軍への自発的な投降（と米軍に協力しての日本の「終戦促進運動」への参加）、④特別攻撃隊参加の拒否の貫徹」［安川、1997：33－34］。また軍隊内で抵抗した。「対上官暴行罪、抗命罪、奔敵者の増加……北シナ方面軍の第十二軍法会議は、一九四一年から四三年のあいだに、上官暴行三十、奔敵（敵軍に走る）十六等五九九の処刑を記録する」［記念

会・注、2003：183]。これらの中に多くの学徒が含まれた。

16）嶋根は、死を前にした病者の感情表出を、①「規範的表出類型」、②「感情的表出類型」、③「抑うつ的表出類型」に類型化した［嶋根、2001：31－38］。これを学徒の死に様（の中心の感情）に重ねると、「悶死」が②③、「役割」が①、「運命」が①、「再生」が②、「散華」が①、となるだろうか。

【参照文献】

岩手県農村文化懇談会編（岩手県）1961『戦没農民兵士の手紙』岩波新書

Witkop，Philipp ed.,1933『ドイツ戦歿學生の手紙』高橋健二訳　岩波書店　1938年

大貫恵美子2003『ねじ曲げられた桜――美意識と軍国主義』岩波書店

大貫恵美子2006『学徒兵の精神誌――『与えられた死』と『生』の探求』岩波書店

北村恒信2002『戦前・戦中ものしり大百科　戦時用語の基礎知識』光人社

桑原敬一2006『語られざる特攻基地　串良――生還した「特攻」隊員の告白』文藝春秋

嶋根久子2001「死にたいする四つの感情表出類型」副田義也編著『死の社会学』岩波書店27－67頁

高橋三郎2004「戦没者の手記分析についての一考察――森岡清美『決死の世代と遺書』をめぐって」中久郎編著『戦後日本のなかの「戦争」』世界思想社　47－65頁

田中仁彦1968「世代の断絶と連帯」朝日新聞社『朝日ジャーナル』10巻4号　10－13頁

東大戦歿學生手記編集委員會（東大）編1947『はるかなる山河に――東大戦歿學生の手記』東大協同組合出版部

中村秀之2006「特攻隊表象論」倉沢愛子他編『戦場の諸相』（岩波講座5　アジア・太平洋戦争）岩波書店　301－330頁

日本戦没学生記念会（記念会）編1995『新版　きけわだつみのこえ――日本戦没学生の手記』岩波文庫

日本戦没学生記念会（記念会）編2003『新版　第二集　きけわだつみのこえ――日本戦没学生の手記』岩波文庫

白鷗遺族会編1992『雲ながるる果てに――戦没飛行予備学生の手記』日本図書センター

辺見じゅん2002『昭和の遺書――南の戦場から』文藝春秋（文春文庫）

辺見じゅん2003『戦場から届いた遺書』文藝春秋（文春文庫）

Homepage，a，2007.10「軍隊内務令」の「日本財団図書館」の項

Homepage，b，2007.10、「特別攻撃隊」の「Wikidepia」の項

Homepage，c，2007.10、「戦前の弾圧の犠牲者」の「決着はまだつけられていない」の項

保阪正康2002『「きけわだつみのこえ」の戦後史』文藝春秋

星野芳郎1966「思考切断の悲劇」朝日新聞社『朝日ジャーナル』8巻1号　43-47頁

森岡清美1993『決死の世代と遺書――太平洋戦争末期の若者の生と死』（補）吉川弘文館

森岡清美1995『若き特攻隊員と太平洋戦争――その手記と群像』吉川弘文館

安田武1967「戦没学徒兵の慟哭――二十一年目の風潮に思う」『展望』97号　筑摩書房　109－117頁

わだつみ会編1993『学徒出陣』岩波書店

（あおき　ひでお・社会理論・動態研究所）